Color Science Association of Japan

法隆寺の丹塗り（にぬり）

Ninuri in Horyuji Temple

児島　修二　元関西ペイント株式会社　Shuuji Kojima

1.まえがき

法隆寺は607年に創建され、670年に炎上し、708年に再建されたとされているが、いずれにしても、今から1300年前の飛鳥時代の建物で、これは我が国に現存する最古の寺院建築物であり、また世界最古の木造建築物でもある。'93年には「世界文化遺産」にも指定された。

…… この建物の堂塔伽藍には赤色の塗り→丹塗りが施されているのである。

2.丹塗り(にぬり)とは

丹塗りとは、天然に産する赤い土、すなわち粗製の弁柄•鉛丹•朱などの土性顔料をニカワ水(一両目溶き)で練って作った一種の水性塗料を用いた赤塗り仕上げのことで、これは我が国最古の建築塗装仕上げである。

この丹塗りの技法は、仏教の伝来→仏工•寺工の渡来(577年ころ)によってもたらされた中国〜百済(くだら) の様式を模したもので、建物の荘厳(しょうごん)化と保護を目的としたものである。

この丹塗り仕上げは、いくた性能の優れた近代塗料の発達している現代でも古文化財の仕上げや保全には、依然として使用され、その伝統が生き続けている。

…… 昭和51年(1976)に再建された、奈良薬師寺の金堂、昭和55年(1980)に復興した同寺の西塔も、この丹塗りで、色鮮やかに仕上げられた。

色は≒10R4/6

3.法隆寺通い

1300年前に塗られたであろう法隆寺の建物の外観は、永年の風雨でほとんど色をとどめていないが、よく見ると軒下、隅々などに丹色(にいろ)が残っており、建物の内部は明らかに赤が残っている。

…… どんな所に、どんな色が残っているかをカメラにおさめ、一人でも多くの人々に、この日本最古の塗装の跡•色を知らせたいという思いで法隆寺通いをした(1993年3月〜5月、6回)。

4.丹塗り跡•色値

法隆寺の参拝コースに従って、丹塗りのありかを追跡してみよう(カラースライドでお見せする)。

1)南大門(室町中期、1430年再建)

寺院の案内書には「丹塗りせる優麗なる構えなり」と記してあるが、門をすーっと通っただけでは、色は全く見えてこない。行きつ、戻りつして、じっくりと軒裏を見上げると、隅の部分や斗栱(ときょう) の部分に丹色が残っている(図-1)。

色は目視で≒2.5YR6/8

2)中門•回廊(飛鳥時代建立)

ここもちょっと見ただけでは、丹色は

NII-Electronic Library Service

Color Science Association of Japan

見えてこない。じっくり目をこらすと、斗栱部や格天井縁に丹色の跡が認められる。…… さらに日を変え目をこらしていると、中門・中央部の桁柱(けたばしら)の下面に、べったり、明りように丹色の跡が見つかった(図-2)。……これはまさしく、1300年前の色と思われる。

色は目視で≒10R5/12

3)五重塔・金堂(飛鳥時代建立)

どちらも、外部には色が残っていないが、塔・堂の内部の扉・柱・天井桟などには、明らかな丹塗りが残っている。

五重塔内部 2.5YR6/8(図-3)
金堂内部 5R5/8

4)大講堂(平安時代、990年再建)

ここは大屋根の軒先が深いので、外側に面した列柱の斗栱部、軒下垂木部も色がはがれることなく、丹色が明らかに残っている。内部は構造物がすべて丹色の連続である。

色は2.5YR 6/8(五重塔内部に近い)

5)夢殿(天平時代、739年建立)

軒下の垂木・斗栱・扉に、はげかかった丹色が残っている。隣接の伝法院の北側連子窓には緑青が残っている。

5.円柱の表情(図-4)

エンタンスのある円柱・列柱に近づいてじっと対面すると、永年の風雪にさらされ荒れた木肌の表情がせまってくる。実にきびしく、りんとしている。よくぞ、1300年も生き耐えたなと、感謝の目で眺め入った。

6.あとがき

法隆寺では、上を向いて歩こう。1300年前の丹色が見えてくる。

('94-1-30)

丹塗り跡

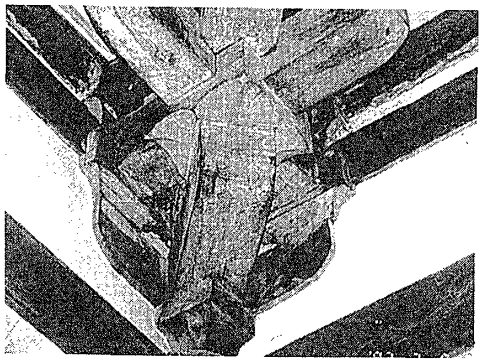

図-1　南大門軒下・斗栱(白くまだらの部分)

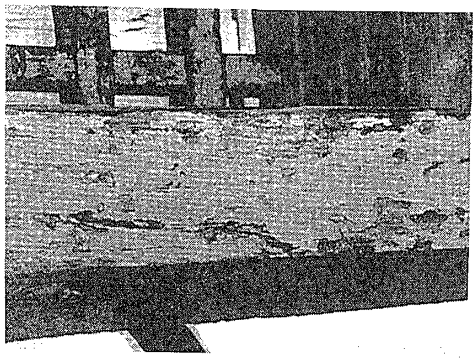

図-2　中門桁柱下面(白くまだらの部分)

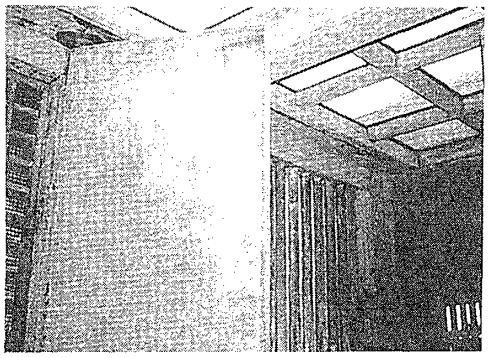

図-3　五重塔内部　扉・天井格子縁

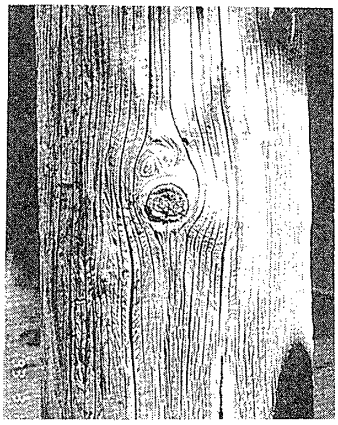

図-4
円柱1300年
の表情

NII-Electronic Library Service